

スウェーデンに寫生を試みたりき當時の作なる初期の繪畫は一ダ  
 ース、二ギニー位なりき。それよりポーサーの手にて展覽會へ  
 出品しけるに忽ち、名聲を博して、陸軍大佐ウインサー後にブ  
 レーマウスの伯爵の知遇を受け、終には此人の推薦にて、繪の  
 賣價をも増加し、門業も多く加はるに至れり。されどこれが爲  
 に氏が書割畫家としての勢力は徐々に削減し來りて、遂には全  
 く劇場との關係を斷つに至りぬ。氏が名殘の書割を描きけるは  
 ウォルヴァーハンプトン劇場なりき。されば此變化は氏の生活  
 に進歩を與へず、以前よりは多數の仕事なして、漸くやゝ満  
 足なる收入を得るに止りき。門第には各十シリング宛の小畫  
 を描きて、教科用として賣り。又自作の小品は數シリングか  
 大作は五六ポンドに賣るゝやうなりぬ。氏はその所得の少きを  
 恨みながらも、一八〇八年に地主の娘マリー、ラッヂと結婚しつ。  
 ダルウイッチ、コンモンに家を持ちぬ。その翌年に一子を擧げ  
 ぬ。此時此青年畫家は年齢僅に二十有七、いよ／＼新しき眞面  
 目なる責任の起り來れるなりける。これが爲に職業にも精勤せ  
 ざるを得ざるに至り。絶えず作品は次より次と製作しけるも、  
 多くは至極廉價にすらも賣れざりき。或物は十二枚、あるは二  
 十枚を一括し、仲買の手より畫手本として教師等に賣りぬ。又  
 多くは引破りつ、其内の大いなるものは、單に板紙を以て覆ひ  
 置きて、額縁代の儉約をなしける程なりき。(つゞく)

一ギニーは約十圓五十錢、ロ一シリングは約五十錢、  
 一ポンドは約十圓

## ち、ぶ日記

訂 歴 生



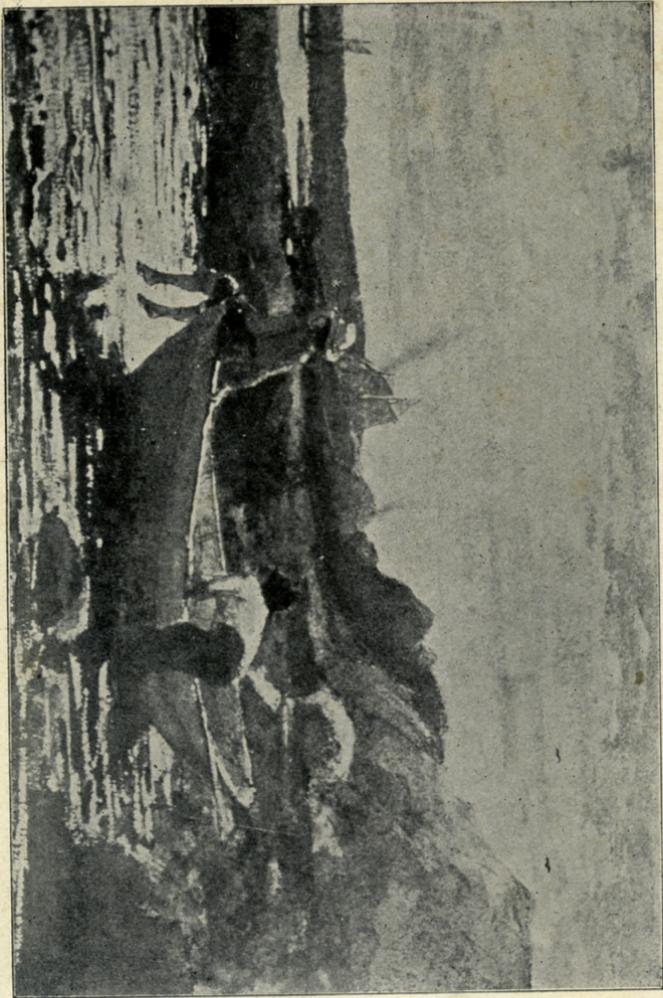
葉月四日

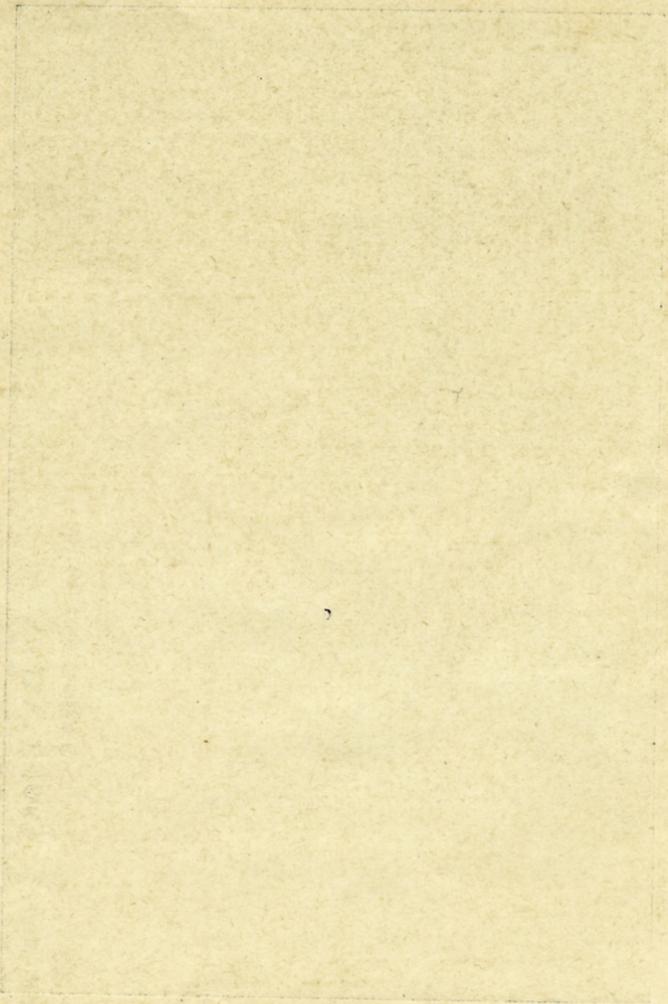
前橋行列車は八時上野を出づ。斜に

差入る朝日遮らんとて、惣ての窓を閉ちしたため  
 風も通はず。人々たゞ暑しとのみ云ひて扇子遣  
 ふ音のみ高し。青き稲田、青き桑畑、變らぬ景色  
 に欠呻催さるゝ正午の頃本庄驛に着、停車場前なる江川屋とい  
 へるに入りて書齋を命じ、大宮御行の馬車の出づるをまつ。風  
 なく日は照りて、身を置くべき處さへなし。この日、本年に入り  
 ての尤も暑き日なりと人々云ふ。馬車は一時に發すべき定めな  
 るを、暑氣つよしとて、四時に近き頃迄待たされぬ。乗合の客  
 せまき室に満ちて身動きも叶はず。車は西に傾きし日に向ひて  
 進みゆくものから、さきにも増して暑く、肌着は汗のために水  
 に浸せしやうになりぬ。

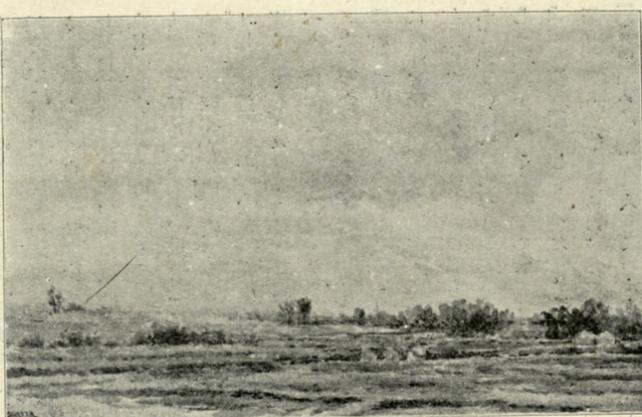
上毛の三山、日光足尾の山々も漸くものゝ影となりて、ひとり  
 前途に秩父の諸山の近づくのみ。本庄より二里程兒玉の町を過  
 ぐ。明日は舊曆の七夕なりとか、家々に立てる笹の葉には、赤  
 き白き黄に青に、さまざまの色紙の風に舞ふさまいと美はし。  
 三里にして太駄といふ馬繼場あり。このわたり右も左も小高き  
 岡にて、道に沿ふて小流あり。うす紅なる石竹の亂れさける、  
 白き山百合の錢んの香をはなてる、とり／＼にめてたし。皆野  
 近くにて日はくれぬ。

九時大宮の町に着きぬ。月は入りたれど星明き夜なり。親切な





る乗合の一人に送られて、知人關氏を訪ふ。今宵は夜も更けたればこゝに二泊する事と定めつ。浴し衣を更へ、荒川の鮎に夕飯も濟ませ、新しき蚊帳の快よき香りに誘はれて、いつしか夢に入りぬ。



武甲山にて、形容峻烈、濃き紺碧の山色は、折から連りに動く白雲のために、一層光彩を添へて頗る壯大の觀を呈せり。宿

を關氏のゆかりなる角屋といふに定めぬ。此家にて第一の室新坐敷といへるに通されしが、うす暗くして蠅多きはいとはし。午後荒川の岸にいて、二三のスケッチを試む。鮎漁る男、水に遊ぶ童など面白き添景の人物もありて、夏の河原も無趣味にはあざざりき。

宿に歸れば、風呂の加減よしとて浴衣もち来る。糊硬くして身に添はず、恰も新しき數紙に包まれしに似たり。

六日 くもり。武甲山も霧のために見えす。やがて雨ふり出したれば、宿に在て折柄訪ひ來られし關氏とかたる。

七日 小雨。我宿れる角屋は、この地第一位の旅舎にて、天秤にせる行商人、車挽の類は曾て宿泊させしとなしと誇り、割合によく行届居れど、給仕の女子共の不作法なるは快よからず。只多くの中に、十三四の人すれぬ小娘のありて、これのみぞや、床しと思はれぬ。

海に遠き地なれば、食膳の淋しさば云ふ迄もなし。鮎のいろ／＼の料理、柳川、鯉こく等最早口に飽きたり。

八日 くもり秩父には晴天なきことかと怪しまれぬ。晝過る頃より雪間に日の光りを見る。町に出て、街道を寫すに、見る人前後を圍みてうるさし。前の家より一人の女房いてきて、そのやうに近々と取まきては、繪をかく人のいかに暑からんと、集まれる人々を遠ざけ呉れしは、美の神の假りに姿を現はせしにもやと嬉しかりき。

夕食の給仕はかの少女なり。生れは何處ぞと問ふに、本庄なり

といふ。父母ありやといへば、さきつ年物争して、父は高崎に住居し、己れは母と共に此大宮に住めりといふ。東京にゆきしもありやと問へば、幼きをり一度ゆきぬ、都には兄のあれは、近きにこゝを去りてかの地に奉公する筈なりと答ふ。この家のさまの、かゝる白絲の如き少女に、よきことあるべしとも思はれれば、我は速にその事の實になれかしと心に希ひぬ。

九日 空曇りたれど後には晴るゝ望あり。三峯には往けずともせめては贅川迄もと、思ひ立ちて發足す。往手は唯濃々たる白雲の、深くく山を掩へるのみ。一里程にして影森村あり。上田原を過て猶一里、贅川橋あり。此春新設せられしもの、白く青く生々しきペンキの色の、四方の景色をそこなうはいと惜むべし。橋を渡りて、石竹萩など美はしく咲ける細道を川に沿ふて上り、十一時贅川村につき、角六とよべる唯一の旅店に投ず。導かれて奥の間にゆくに、家古く疊破れたれど、南に面して河に向ひ、位置高ければ遠きを望み得べく、眺めいとよし。秋の紅葉 冬の雪、いかに面白からんと坐るその頃の忍ばれぬ。僅かばかりの宿への心づけに酬ひんとてか、俄にととのへしと覺しき駄菓子、そと悟りて集まれる蝸に、見る間に黒くなるる、山家の夏の厭はしき一つなり。風のよく吹き通すに、紙障たて切りて暫らく疲を休めぬ。

樓前の眺めば、夜に入りていよゝ美はしくなりぬ。月光水の如く冷やかに、贅川の流れば、一筋白く輝きて水音かすかに、次第に細く暗く、終には夢の如く消え去り、對岸農家の灯は、

汀の漣に映じて一層清涼の氣を加えぬ。

十日 夙に起きて戸をくるに、朝日まばゆく空に雲なし。二三日前秋立ちしときしが、山風身に染みて覺えぬ。都の方に御馳走なりとて、昨夜も今朝も膳に鮎あり。我はずでに、大宮にて此香りに飽きしものを。

携え來りし荷物の多くは此家に預けて、只畫具と三脚一本の洋傘のみ、身輕に裝ふて出發し、昨日と同じく贅川に沿ふて上る。一里程にして小さきトンネルあり。猶進むと十數町、遙かの谷底に數軒の茶屋と一條の橋見ゆ。左三峰山道と彫れる道標に沿ふて下ると半里あまり、漸くにして橋に達す。見下せば贅川の急流、矢の如く岩石の間を縫ふて淙々音高く走り、實に其名に背かず。この下流が花を泛べ盃を流す隅田川なるかと思へば、又多少の感なき能はず。あはれこの花、我が橋上の感々都の友に告げよと、我は帽に挿みし、石竹の一輪をとりて水に托しぬ。登龍橋を渡れば直ちに山道にて、社へは五十二丁あり。赤き鳥居を入り、杉檜生茂りて晝も小くらき石道を上りゆくに、時ならねばか參詣の人にも逢はず、折々きこゆる老鷲の囀も、轉た淋しさを増すのみ。石標二十を數ふる頃、幽かに水聲きこえ、朽ちたる小橋ありて傍に二條の飛瀑かゝれり。その形常に變りて面白きに、歸り路には寫しゆかんなど心に約しつ。爰より十町にして茶店あり。更に十二町そこにも茶店あり。是より十町、正午頃漸く山上に達す。

老杉の間の鳥居を越ゆれば、道少しく下り、惣門を経て右に本

社あり。規模大ならざれど、釣合よき社なり。拜し終りて本坊へゆくに、帳場と貼札ある處に、八字髯いかめしき祀官控えたり。兼て教へられしまゝ、半圓貨一個紙に包めて出すに、祀官は恭しく受けて、小童をよび御案内といふ、かくて導かれて樓上奥深き八疊の間に通されぬ。

春期一ヶ月の收入二萬金、參詣人の宿泊するもの一夜千に近しときししが、見渡せば升形に作れる巨屋、室の数は大小五六十もあるべく、よきあしき其料に應じて待遇するよしにて、只の十三錢より六七圓迄の部屋ありといふ。我が部屋には、床に楓湖の幅をかけ、疊の上には稍也褪せたる毛氈布きつめあり。廣縁には洗面所の設もありてよく行届居れど、男世帯の掃除充分ならず、何となく不潔なるは快よからず。

室の中央には大なる獅鬣火鉢あり。さきの祀官の、炭火あまた持來り、猶其上に炭を山の如く加えて去りぬ。曾て伊豆房州の地に遊びて、寒中火を要せぬともありしが、こはその反對にて面白し。程なく湯を運び茶を運び、大なる高杯といふものに、紅白の有平糖うづ高く盛り來りぬ。齋川の宿の駄菓子とさま變りて、これは又あまりに見事にて手を出し兼ねたり。

疲れて苦しと思ひしも、勇を鼓して本社に寫生をなす。折々白霧たち込めて寸前を見分かぬ時あり。寫し終りて室に戻れば、風呂湧きたりとて浴衣と上草履持ち來る。浴場は大にして清らかなり。

本社より五丁にして奥の院あり。毎月十日に茶飯、十九日に赤

飯を炊きて供ふるに、今も猶ほ谷屬とよぼるゝ狼のありて、こ

れを食ふといふ。

今日の夕

餉はその

茶飯なり。

例の祀官來り

て、白き

もあれば

御隨意に

といふ。

夜は長き

廻廊の諸

所にあま

たの灯燈

りて美は

しく、海

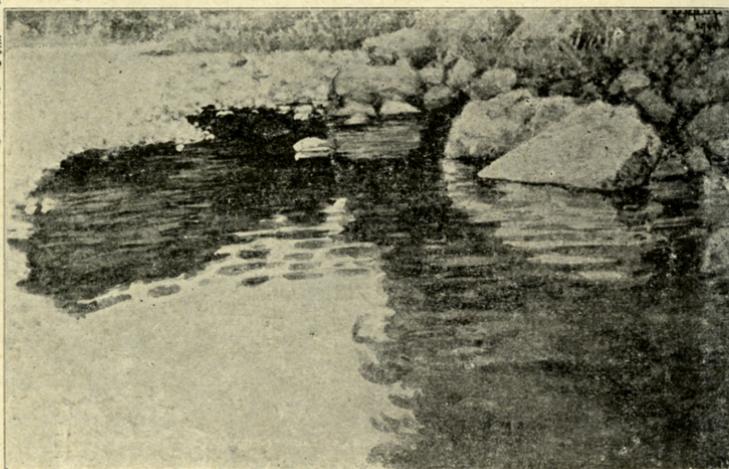
抜四千尺

餘の山中

とは如何

にしても

思はれず、いと賑やかなり。



程經て膳部二つ運ばれ、神官來りて酒を勸む。酒は此山中にて醸せしものか、味極めて芳烈なり。肴には汁二種、口取、酢の物、甘藷、あへ物等ありて極めて町重なり。盃收まりて後、砂糖かけたる冷し白玉を出す。不思議の饗應なるが、こは昔しよりの例にて、酒は何程にても飽く迄興へらるゝといふ。

山上は夏も朝夕は裕ならては凌がれず、蚊といふものは曾て見しとなしとき、しが、今宵はいかにしげんいと蒸し暑く、無しといふ蚊も、數多くいて來て耳元にうるさく加へて蚤さへ少なからで、中々に夢に入りがたし。十一時、十二時、一時と、各所に鳴り響く時計の音のみ高く、便所へと通ふ廊下の足音、近くの梢に名も知らぬ鳥の物すこき叫び、雨戸なれば、夜嵐は紙障を動かし、心静まらず。とかくして二時鳴る。庭には拍子木うちて廻る。暫くして寝せたる男の部屋々々の油さしてゆく。燈火いや明かにして猶々眠りがたし。遙か離れし勝手の方には、早や味噌磨ららしき音きこゆ。手さぐりに蚤をとると幾十、さすがに疲れを覺えて、少しくまどろみしと思ふ間もなく、社殿の方にけたましましき太鼓の響、續いて本坊の雨戸くる音、早や入々の起き出る氣配に漸く結びかけし夢を破られ、我も過ぎ目をこすり、床を徹しぬ。この時枕頭のウオッチ短針IVを指せり。

\* \* \* \* \*

## 富士山

アルフレッド、ハイッンス著  
關澤 四丁 譯



二合目石室の内側は比較的に温い。小高い床には粗末な敷物があつて、この上へ布團を布くのである。頓て暗くなつたので、皆々寝に就いた。遅く著いた人々并びに宿の夫婦とも合せてこの

小屋に十三人寝たのである。こゝは先づ少ない方で、頂上では二十人餘も居つたと思ふ。尤も一枚の布團に二三人も寝て居るので確な計算も出来なかつた。かゝる富士山上ですらも日本の警察の監視を免かれることは出来ない、旅行券を宿の主人が檢める。苟もこゝに泊つたものは皆その住所姓名を帳面に記されるのである、朝の二時に宿の主人に起されて戸外へ出ると、頭上にたゞ富士ばかり、全部が穩やかに見える。そして富士の頂上近くには一痕の月が明に掛つて居る。下にはわれ等の蹈んて來た灰の傾斜や原があつて、猶遠い處には、箱根の連山が見え、更に地平線下は月光に輝く雲に半ば蔽はれて居るのであつた。勢のよい人は直に頂上へと出發したらうが、我等は戸外を暫時見たので、寒さに慄へたため再び堅い寢所へ這入つたが、それにしても出發した時は太陽が未だ出なかつた。道連れは汚い白い軍服を着けた若い歩兵と、上の石室を修繕する板を背負つた面白い人夫とであつた。

石室から石室への道は曲折極りないが、別に道に迷ひもしなかつた。併し七合目の如きは飲用水缺乏で、僅く雪解の水が管か